

〔原著〕

## スポーツ健康学系大学生が抱く高齢者のイメージ

坂井 智 明<sup>1</sup>

### 要 旨

超高齢社会を迎え、他の世代と良好な関係を維持していくことが重要である。そこで、本研究ではスポーツ健康学系の学生を対象に高齢者に抱いている認識の特徴を明らかにすることを目的とした。スポーツ健康学系学部所属の1年生から3年生までの556名に対し、祖父との同居経験、高齢者に世話になった頻度、エイジズム、高齢者のイメージに関する調査をおこなった。

その結果、以下のことが明らかになった。

- ・学年ごとで高齢者に対するイメージの違いはなかった。
  - ・女性は男性と比べて高齢者に肯定的なイメージを持っていた。
  - ・同居経験のある者は、エイジズム、特に回避について、また高齢者のイメージについては力量性に関して高齢者に肯定的なイメージを有していた。
  - ・幼少期に高齢者から世話になった頻度が高い者ほど、嫌悪・差別、回避といったエイジズムや評価、豊かさ、親和といった高齢者のイメージについて肯定的なイメージを有していた。
- 今後は、エイジズムや高齢者のイメージと縦断的な教育効果の関連を検証することが必要である。

**キーワード：**エイジズム、高齢者イメージ、同居経験、高齢者の世話になった頻度

### はじめに

本邦では、健康寿命が男性72.14年、女性74.79年に延伸しているものの、未だ平均寿命との隔たりは大きい [7]。団塊の世代が75歳を迎え、いわゆる後期高齢者人口の増加が予測される社会を乗り切るには、高齢者に対する支援の質を高い状態に保ちながら効率よく提供で

きるか大きな課題である。介護・福祉分野では、老老介護という言葉があるように高齢者を支援する担い手が高齢者になることもあるが、高齢者の健康づくりを支援するには若い世代がその役割を担う。多くのスポーツ健康学系学部で健康運動指導士や健康運動実践指導者といった健康づくりに関する資格を取得でき [5]、卒業後は運動療法をおこなっている医療機関やスポーツ

1 名古屋学院大学スポーツ健康学部

Correspondence to: Tomoaki Sakai

E-mail: tsakai@ngu.ac.jp

Received 13 July, 2018

Revised 18 August, 2018

Accepted 20 August, 2018

クラブ、自治体等での活躍が期待される。その期待に応えるには、スポーツや健康科学に関する知識を習得することはもちろん、若者が高齢者について正しい認識を持ち、理解を深められるかが支援の質を高める上で重要である。

若者が持つ高齢者への認識について、これまでに高齢者観から研究が進められてきた。西村と平澤 [9] は、「若者」、「中年」、「高齢者」、「男性高齢者」、「女性高齢者」、「認知症高齢者」という6つの概念に関するイメージをセマンティック・ディファレンシャル法（以下SD法）にて評価し、若齢者は高齢者に比べて「高齢者」に否定的なイメージを持つ傾向が大きい、部分的には肯定的なイメージを持つことを報告した。高橋 [13] は、高齢者のイメージの中でも特に身体的活動に否定的なイメージが持たれることを指摘した。高齢者観を形成する要因として、「老人との生活経験」、「メディア・文化的情報」、「親の老人に対する姿勢」等に加えて [12]、高齢者教育による高齢者観の肯定化に関する効果も報告されている [3]。これらの先行研究によって、若者は高齢者に否定的なイメージを持つ傾向にあるが、高齢者との生活経験や正しい認識を持つことでイメージが肯定的になることが期待できる。

若者が高齢者に抱く認識を検討した先行研究の多くは、低下した機能を回復・維持することに直接携わる医療・看護・福祉系分野の学生を対象にしている。一方、健康づくりの人材を養成する学校では、高齢者の健康や身体の特徴、加齢に伴う疾病の特徴などを学ぶが、健康づくりの主対象となる高齢者に対して学生がどのような認識を抱いているか明らかにされていない。現在の体力を保持し、人生を豊かにするため運動やスポーツをスポーツクラブや運動教室等で実践する高齢者は増加しており、先行研究

では取り扱われていない健康づくり分野の学生が抱く高齢観に関するアプローチも重要である。

そこで本研究では、将来高齢者の健康づくりに携わる可能性のあるスポーツ健康系学部の学生が高齢者に対して抱いている認識を明らかにすることを目的とした。

## 方法

### 1. 対象者

調査は、東海圏と近畿圏のスポーツ健康科学系学部 zu 所属する大学生640名（1年生199名、2年生261名、3年生180名）に依頼し、2017年6月と10月にそれぞれの大学でおこなわれている講義の後に実施した。

調査に際し、研究の目的、質問紙への回答は任意であること、学年と性別以外の個人情報は聞き取らないこと、研究目的以外に調査結果を使用しないこと、本調査と成績は無関係であることを調査対象者に口頭で説明した。さらに、回答したくない場合あるいは既に同様の調査に回答をした場合は白紙のまま提出することと伝えた。本調査への参加の同意は、質問紙の回答、提出をもって判断した。

### 2. 質問紙調査法

質問紙は、これまでの高齢者との関係（同居経験、幼小期に世話を受けた経験）、高齢者に対する偏見（エイジズム）、高齢者のイメージに関する計39項目で構成した。

同居経験については、「現在同居中」、「過去に同居経験あり」、「同居経験なし」で回答させ、現在同居中と過去に同居経験を合わせて同居経験ありとした。また、幼少期に高齢者から世話を受けた経験については、「頻繁にあった」、「時々あった」、「ほとんどなかった」で回答さ

せた。

エイジズムに関する質問には、原田ら [1] が作成した日本語版 Fraboni エイジズム尺度短縮版を用いた。この質問紙は、日本の社会・文化的文脈に適合した 14 項目から成り、3 つの因子「嫌悪・差別 (6 項目)」、「回避 (5 項目)」、「誹謗 (3 項目)」で構成される。全体の  $\alpha$  係数は 0.85、因子の  $\alpha$  係数も 0.70 を超え、十分な信頼性が確認されている。いずれの項目も「そう思う」、「まあそう思う」、「どちらともいえない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の 5 件法で回答させ、「そう思う (1 点)」から「そう思わない (5 点)」までに得点を付した。質問項目には逆転項目が含まれていたため、その項目に対して得点の高い方が高齢者に対する肯定的な認識になるように得点を逆転させた後、全項目と因子ごとの和を求めてそれぞれの得点とした。

高齢者のイメージに関する質問は、SD 法による先行研究と同様の 23 項目で構成した [13]。それぞれの形容詞対には 5 段階の評定尺度 (非常に、やや、どちらともいえない、やや、非常に) で回答させた。この質問紙は、「評価 (10 項目)」、「活動性 (5 項目)」、「豊かさ (4 項目)」、「親和 (2 項目)」、「力量性 (2 項目)」の 5 因子で構成され、その妥当性が確認されている [12]。得られた回答に対し、肯定的なイメージが高得点になるように各評定尺度に 1 点から 5 点を付し、全項目と因子ごとの和を求めてそれぞれの得点とした。

### 3. 統計分析

データは、中央値 (25%–75%) で示した。有効回答に対する性別、学年、同居経験の有無、幼少期に高齢者から受けた世話の頻度の違いを明らかにするため、カイ二乗検定を施した。次

に、エイジズムと高齢者のイメージについて全項目と因子ごとの和を性別、学年、同居経験、幼少期に高齢者から世話を受けた経験で分析した。性別と同居経験の比較には Mann-Whitney U 検定、学年と幼少期に高齢者から世話を受けた経験の比較には Kruskal-Wallis 検定を施し、有意差が認められた項目に多重比較をおこなった。統計分析は、統計ソフト (IBM SPSS Statics version 23.0, 日本アイ・ビー・エム株式会社, 日本) を用いておこない、統計的有意水準を  $P < 0.05$  に設定した。

## 結果

### 1. 研究対象者の背景

最終的な有効回答数は 566 名 (88.4%) であり、その内訳は 1 年生 166 名、2 年生 226 名、3 年生 174 名、男性 422 名、女性 144 名であった。高齢者との関係において、同居経験ありが 241 名 (42.7%)、同居経験なしが 324 名 (57.3%) であった。幼少期に高齢者から世話を受けた経験について、頻繁にあった 367 名 (64.9%)、時々あった 221 名 (39.1%)、ほとんどなかった 84 名 (14.8%) と分類された。この結果を、性別、学年別に表 1 に示した。学年別にみた同居経験を除き、高齢者との関連は類似した分類であったことを確認した (同居経験: 性別 ( $\chi^2 = 2.803$ ,  $df = 1$ , n.s.), 学年別 ( $\chi^2 = 8.655$ ,  $df = 2$ ,  $p < 0.05$ ); 幼少期に高齢者から受けた世話: 性別 ( $\chi^2 = 0.540$ ,  $df = 2$ , n.s.), 学年別 ( $\chi^2 = 3.748$ ,  $df = 4$ , n.s.))。

### 2. エイジズムに関する比較

エイジズムについて、女性は男性よりも高齢者を平等 (男性: 65 (60–69), 女性: 66 (62–70),  $p < 0.05$ ) にみていること、学年に有意

表1 これまでの高齢者との関係

	同居経験		高齢者の世話になった経験		
	あり	なし	頻繁にあった	時々あった	ほとんどなかった
性別					
男性	171	250	271	88	62
女性	70	74	96	26	22
学年					
1年生	75	90	106	34	25
2年生	80	146	141	45	40
3年生	86	88	120	35	19

表2 性別が高齢者のイメージに与えた影響

	男性	女性	
エイジズム			
全体	65(60-69)	66(62-70)	p < 0.05
嫌悪・差別	25(22-27)	26(23-27)	p < 0.05
回避	16(14-18)	17(15-19)	p < 0.05
誹謗	10(8-11)	10(8-11)	p = 0.26
高齢者のイメージ			
全体	71(66-77)	74(67-80)	p < 0.05
評価	33(30-37)	35(32-39)	p < 0.05
活動性	12(10-14)	13(10-15)	p < 0.05
豊かさ	13(12-14)	14(12-15)	p < 0.05
親和	8(6-8)	8(7-9)	p = 0.26
力量性	5(4-6)	5(5-6)	p = 0.50

中央値 (25%-75%)

差が認められないこと (1年生: 65 (61-70), 2年生: 65 (60-69), 3年生: 65 (60-70),  $p = 0.75$ ) が明らかになった。また, 同居経験がある者ほど (表2), 幼少期に高齢者の世話になった頻度が多い者ほど高齢者を肯定的に捉える傾向にあった (表3)。

因子別にみると, 女性は男性よりも嫌悪・差

別と回避の因子について高齢者を肯定的に捉えていた。同居経験の違いでは回避について「同居経験あり」は「同居経験なし」に比べて肯定的に捉えていた。また, 幼少期に高齢者から世話になった頻度が多いほど, 嫌悪・差別と回避について高齢者を肯定的に捉えていた。なお, 多重比較の結果, 有意差が認められた項目はい

表3 同居経験の違いが高齢者のイメージに与えた影響

		同居経験あり	同居経験なし	
エイジズム				
	全体	66(61-70)	65(60-69)	p < 0.05
	嫌悪・差別	25(23-28)	25(22-27)	p = 0.37
	回避	17(15-19)	16(14-18)	p < 0.05
	誹謗	10(8-11)	10(8-11)	p = 0.76
高齢者のイメージ				
	全体	72(66-79)	71(65-77)	p < 0.05
	評価	34(31-38)	34(31-37)	p = 0.06
	活動性	12(10-14)	12(10-14)	p = 0.06
	豊かさ	13(12-14)	13(12-14)	p = 0.42
	親和	8(6-9)	8(7-8)	p = 0.66
	力量性	5(5-6)	5(4-6)	p < 0.05
中央値 (25%-75%)				

表4 幼少期に高齢者から受けた世話の頻度が高齢者のイメージに与えた影響

		頻繁にあった	時々あった	ほとんど なかった	
エイジズム					
	全体	66(61-70)	64(58-69)	65(60-69)	p = 0.07
	嫌悪・差別	25(23-28)	24(22-26)	25(22-27)	p < 0.05
	回避	17(15-19)	16(14-18)	16(14-18)	p < 0.05
	誹謗	10(8-11)	10(8-11)	10(9-11)	p = 0.30
高齢者のイメージ					
	全体	73(67-79)	70(66-75)	69(65-75)	p < 0.05
	評価	34(31-38)	33(31-36)	32(30-35)	p < 0.05
	活動性	12(10-14)	12(10-13)	12(10-14)	p = 0.10
	豊かさ	13(12-14)	13(11-14)	13(11-14)	p < 0.05
	親和	8(7-9)	7(6-8)	7(6-8)	p < 0.05
	力量性	5(4-6)	5(4-6)	5(4-6)	p = 0.95
中央値 (25%-75%)					

ずれも「頻繁にあった」と「時々あった」の間に有意差が認められた ( $p < 0.05$ )。学年ごとに比較した結果、いずれの因子においても有意差は認められなかった。

### 3. 高齢者のイメージに関する比較

高齢者のイメージについて、女性は男性よりも高齢者を肯定的に捉え（男性：71（66-77），女性：74（67-80）， $p < 0.05$ ），学年ごとに差は生じない（1年生：72（67-77），2年生：71（66-79），3年生：71（66-77）， $p = 0.66$ ）といったエイジズムと類似した傾向がみられた。また、同居経験がある者ほど、幼少期に高齢者の世話になった頻度が多い者ほど高齢者を肯定的に捉えていた（それぞれ表2と表3）。

因子別にみると、女性は男性に比べて評価、活動性、豊かさについて高齢者を肯定的に見ていた。同居経験の違いでは力量性について「同居経験あり」が「同居経験なし」に比べて肯定的に高齢者を捉えていた。また、幼少期の世話になった頻度では、評価、豊かさ、親和について有意差が認められ、評価と親和では「頻繁にあった」が他の2項目に比べ、豊かさは「頻繁にあった」が「ほとんどなかった」に比べて有意差が認められた。学年ごとに比較した結果、いずれの因子においても有意差は認められなかった。

## 考察

高齢者は、マラソンや水泳などのマスターズ選手権に出場する者、健康のため日々運動を実践している者、自分の趣味を大切に日々過ごす者、日常的な動作が困難なため支援や介護を必要とする者までさまざまであり、身体的な機能や社会における役割は他の世代に比べて個人差

が大きい。ところが、高齢者の交通事故や介護、認知症といった否定的なイメージを植え付ける情報を頻繁に目の当たりにすると、高齢者は弱い者だ、手間がかかるといった誤った認識を抱く。さらにその認識が大きくなることで、高齢者と接点のない者が偏見と差別を生んでしまう。この悪循環を断つことを目標に、本研究では、健康で活動的な日常を営む高齢者に運動やスポーツを指導することが期待されるスポーツ健康系学部の学生が、高齢者をどのように捉えているのかその特徴を明らかにすることを目的とした。

### 1. 研究対象者の背景

同居経験のない者が半数以上いたにもかかわらず、幼少期に高齢者の世話になった経験がほとんどない者は12.0%にとどまった。これは、同居していないが祖父母が近所で過ごしていたり、夏休みや年末年始等で帰省した際に体験したりしたことが記憶として残っていたのではないかと考えられる。65歳以上の祖父母と同居するいわゆる3世代家族は年々減少していることから[6]、これらの分類は一般的な傾向と考えられた。

### 2. 学年および性による高齢者観の相違

本研究では、エイジズムや高齢者のイメージについて学年差は認められなかった。質問紙調査を実施した大学では、高齢者の運動・スポーツ、健康づくり活動に関する講義は3年生に設置されていた。ところが、対象となった3年生であっても未だ履修しておらず、全対象が高齢者に関する専門的な授業を受けていない状況であった。今井ら[3]は、高齢者教育を受けることで高齢者に対して賢いというイメージを強く持ち、愛らしいというイメージを持つ傾向が



ある一方、高齢者教育を受けた経験のない学生では「依存的」、「複雑な」、「閉鎖的」というイメージを持つ傾向にあり、高齢者教育を受けた学生が高齢者を肯定的にイメージする傾向にあることを示した。松田ら [8] は、世代間交流を通してライフインタビューをした結果、大学生の高齢者に対するイメージが肯定的になり、個々に合わせて高齢者を支えていくことの必要性の認識が高まったと報告した。今後高齢者について学び、交流を深め、高齢者の実態を知ること、高齢者に対するイメージに学年間に差が生じる可能性が考えられることから、縦断的な調査をおこない、精査することが求められる。

女子学生が男子学生よりも高齢者を肯定的に捉えていた。エイジズムや高齢者のイメージに関する先行研究では看護学や社会福祉学を専攻する女性が大半を占める一方、同世代の男性を対象にした研究は散見されるのみであった [2]。その中で、同じ質問紙を用いた先行研究の結果を比較すると、男性は女性よりもエイジズムは高く [2, 16, 17]、つまり高齢者に対する否定的なイメージが強いことがわかった。看護学生と一般男性を単純に比較することはさまざまな要因が絡み合っているため一般的ではないが、本研究でも同様の結果であったことは意義深い。川本ら [4] は、パーソナリティの加齢と性差について検証し、男性は開放性に、女性は外向性、協調性、神経症傾向で高い点数がみられたことから、生来所有する特徴が高齢者観に影響を与えている可能性が考えられた。

### 3. 高齢者との接触経験による高齢者観の相違

同居経験のある者はそうでない者よりも、かつ幼少期に高齢者の世話になった頻度が多い者が少ない者よりも高齢者に肯定的なイメージを抱いていたが、下位尺度の項目数でみると後者

の方が多かった。同居経験のある方が高齢者に肯定的なイメージを持ちやすいとする研究 [17] と関係ないという研究 [2] がある。高齢者と同居経験があることで高齢者に対して肯定的な認識を持ちやすいとする研究であっても下位尺度の一部に差が認められているにすぎないことから、同居経験は高齢者のイメージ形成にとって強い要因ではないと考えられる。その理由として、高齢者と若者の接し方に問題があると考えられる。同居は高齢者を認識する上で貴重な機会ではあるが、接する時間が長ければ人の良い面も悪い面も目の当たりにする。人の悪い面を見ることで否定的なイメージを抱くため、高齢者の肯定的なイメージ形成の強い要因にはならなかったと考える。一方、世話とは面倒をみてもらうことであるから、相手に対するイメージが良くなる。親や祖父母の態度が高齢者のイメージ形成に強い関連を持つ可能性が指摘されていることから [11]、高齢者の肯定的なイメージ形成には、ただ単に高齢者と接する機会を増やすだけではなく、高齢者の良い面を若者に見せるなどそのやり方を工夫する必要があると考える。

本研究では、調査対象者の性別による比較をおこなったが、高齢者を性別で比較しなかった。学生の高齢者観について男性高齢者と女性高齢者に対する構成に大きな差異は認められないが、男性高齢者のイメージ得点は女性高齢者よりも「出世、名誉欲」「目標、達成」「自己顕示」「強さ」の因子で有意に高く、「共感関係性」「社会集団との交流、協調」で有意に低い [10]。また西村と平澤 [9] は、男性高齢者と女性高齢者に生じる平均年齢の差に対しては基本的な相違はみられないが、「遅い」「弱い」「自立」といった観点では女性高齢者が否定的に捉えられていた。男性高齢者と女性高齢者の世話になる状況

が異なる可能性も十分に考えられるため、さらなる詳細な調査が必要と考えられた。

本研究によって、スポーツ健康学系学部に所属する大学生が抱いている高齢者観が明らかになった。今後は、幼少期に高齢者と接触経験が乏しくとも高齢者観を良好にするための手段を明らかにする必要がある。

## 参考文献

- [1] 原田謙, 杉澤秀博, 杉原陽子, 山田嘉子, 柴田博 (2004) 日本語版Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成—都市部の若年男性におけるエイジズムの測定—. 老年社会科学, 26(3): 308-319.
- [2] 原田謙, 杉澤秀博, 柴田博 (2008) 都市部の若年男性におけるエイジズムに関連する要因. 老年社会科学, 29(4): 485-492.
- [3] 今井雪香, 片岡万里, 柳田泰義 (1998) 老人イメージに関する調査 (2). 神戸大学発達科学部研究紀要, 6(1): 225-233.
- [4] 川本哲也, 小塩真司, 阿部晋吾, 坪田祐基, 平島太郎, 伊藤大幸, 谷伊織 (2015) ビッグ・ファイブ・パーソナリティ特性の年齢差と性差: 大規模横断調査による検討. 発達心理学研究, 26(2): 107-122.
- [5] 公益財団法人健康・体力づくり事業財団 (2018) 健康運動指導士 健康運動実践指導者. <http://www.health-net.or.jp/shikaku/index.html> (閲覧日: 2018年6月29日)
- [6] 厚生労働省大臣官房統計局 (2014) I 世帯構造と類型. グラフでみる世帯の状況—国民生活基礎調査 (平成28年) の結果から—. pp. 5-15.
- [7] 厚生労働省健康局 (2018) 第11回健康日本21 (第二次) 推進専門委員会 資料.
- [8] 松田武美, 福田峰子, 梅田奈歩, 森幸弘, 緒形明美 (2016) 看護学生・高齢者世代間交流による相互学習の取り組みの効果-ライフヒストリーインタビューによる傾聴体験を通して. 生命健康科学研究所紀要, 12: 54-61.
- [9] 西村純一, 平澤尚孝 (2009) SD法による高齢者イメージの世代差と性差の研究. 人間文化研究所紀要, 3: 33-42.
- [10] 岡田恵子 (2005) 学生が抱く男性高齢者と女性高齢者のイメージ比較. 川崎医療福祉学会誌, 15(1): 283-288.
- [11] 奥村由美子, 久世淳子 (2016) 講義による高齢者イメージの変化: 発達過程における他世代とのかかわり経験との関連. 帝塚山大学心理学部紀要, 5: 1-9.
- [12] 大谷英子, 松木光子 (1995) 老人イメージと形成要因に関する調査研究— (1) 大学生の老人イメージと生活経験の関連. 日本看護研究学会雑誌, 18(4): 25-38.
- [13] 高橋一公 (2006) 社会福祉を専攻する学生の老人のイメージ—セマンテック・ディファレンシャル法 (SD法) を用いた老人のイメージの測定. 身延山大学仏教学部紀要, 7: 133-146.
- [14] 高橋一公 (2012) 将来像としての「老人観」の測定 (1) —一般的老人イメージのSD法とテキストマイニングによる分析を通して—. 東京未来大学研究紀要, 5: 61-72.
- [15] 高橋一公 (2013) 大学生の老人イメージ測定の試み: 自己老人イメージのSD法とテキストマイニングによる分析を通して. 東京未来大学研究紀要, 6: 85-94.
- [16] 高野真由美 (2010) 看護学生のエイジズムが老人とのコミュニケーション時の情緒状態に与える影響. 川崎市立看護短期大学紀要, 15 (1): 47-51.
- [17] 吉田浩二, 辻麻由美, 原田文子, 大山祐介, 竹嶋純平, 宮原春美 (2017) 看護学生のエイジズムに関する研究. 保健学研究, 30: 39-46.



[Original Article]

## University students' perceptions of the elderly in Japan

Tomoaki SAKAI<sup>1</sup>

### Abstract

As the elderly population increases in Japan, the requirements of support for the elderly is also on the rise. Hence, it is important for the different generations in a super-aging society to maintain healthy relationships with one another. The purpose of this study is to assess ageism as well as perceptions of the elderly among university students. We conducted a questionnaire survey among university students who belongs to the Faculty of Health and Sports (n = 566), including first year, second year, and third year students, in June and November 2016. The questions assessed their experiences while living with their grandparents, their frequency of contact with the elderly, the Fraboni Scale of Ageism (FSA), and perceptions of the elderly. The analysis demonstrated the following results: 1. Ageism and perceptions of the elderly were more positive among female students; 2. No significant differences in perceptions were found among first, second, and third year students; 3. The Avoidance score of FSA sub-items and the Caliber score of perceptions of the elderly sub-items were significantly higher in the group that had experience living with elderly persons; 4. Those who had more frequent contact with elderly persons during childhood had positive perceptions about them, and demonstrated less ageism. In future studies, it is necessary to evaluate the relationship between education, ageism, and perceptions of the elderly, using a longitudinal survey.

**Keywords:** ageism, image of the elderly, experiences living with their grandparents, frequent contact with elderly persons

---

1 Faculty of Health and Sports, Nagoya Gakuin University